

# 高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について

## Investigation report on "OURAIMONO" documents of Takaoka City Library possession

郡 千寿子\*  
Chizuko KOHRI\*

### 要 旨

富山県の高岡市立中央図書館所蔵の資料を調査し、そのなかから「往来物」に分類できる資料について検討考察した。その結果、「佐渡家文書」に2本、「清水家文書」に2本、計4本の近世期版本の往来物資料が所蔵されていることが判明した。当該資料は、それぞれ「佐渡家」「清水家」で所蔵されていたものであり、実際に使用された家庭や背景が明らかであるという点において貴重である。目的別分類では、消息科往来が『新板庭訓往来』の1本、語彙科往来が『正音千字文』の1本、女子用往来が『女用文章綱目』『大宝百人一首紅葉錦』の2本という結果であった。資料の出版地域は、不明なものが2本、江戸が2本であった。

北陸地域における往来物資料の存在意義を考えるうえにおいて、富山県立公文書館所蔵資料の調査結果と合わせて、研究基盤となる調査報告である。

キーワード：富山、高岡、往来物、日本海域、言語生活、文化交流

### 1. 研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究<sup>1)</sup>をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が残存し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情をふまえて、東北地域の往来物資料についての調査研究<sup>2)</sup>をすすめてきた。資料を分類整理し、偏在状況を明示し、資料特性について考察検討してきたが、その研究成果として、地域による文化的背景の相違が明らかとなった。弘前・山形といった内陸地域では江戸文化圏からの影響が大きく、秋田・酒田といった日本海沿岸地域では京都大阪といった関西文化圏からの影

響が大きいことを知り得たのである。地域による文化的土壌の相違を指摘し、陸路だけでなく海路による文化流入や混交、東北と関西の影響関係について確証を得たのであった。今後は、北前船を利用した西廻り航路の重要性を考慮し、寄港地の北陸日本海域へ視野を広げ、地域間格差や言語文化伝播過程の解明へとさらなる研究の進展を目指している。

本稿は、東北地域と海域でつながり、近世期に文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域に調査対象を拡げたものである。富山は、日本海域で東北文化圏と関西文化圏をつなぐ役割を担っていた。手始めに富山県立公文書館の往来物についての調査結果を報告<sup>3)</sup>したが、本稿では、富山県の高岡市立中央図書館所蔵の資料について紹介を試みたい。

### 2. 高岡市立中央図書館と所蔵資料について

高岡市立中央図書館には、古文庫資料室が設けられており、特に江戸期の高岡町に関する近世資料や古文書、古典籍、古絵図が多く所蔵されている。旧家に所蔵されていた文献資料も多く、「朝山家文書」「五十嵐

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

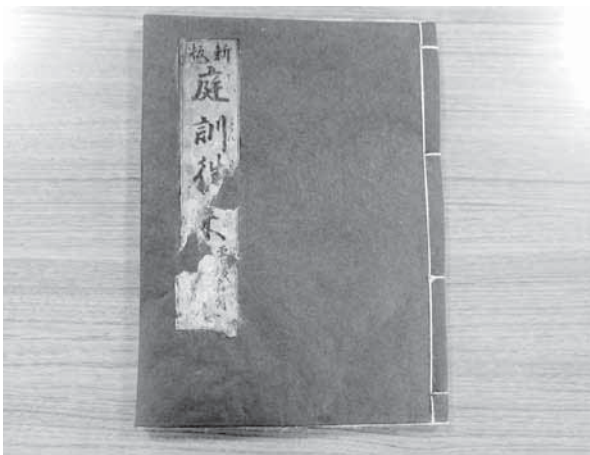
家文書」「大坪家文書」「佐渡家文書」「清水家文書」等がある。今回、往来物資料が確認されたのも、こうした元々は旧家で実際に使用されていたと思われる所蔵文献からであった。

東北地域における所蔵往来物の調査にならば、原則として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理<sup>4)</sup>して、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思う。写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化<sup>5)</sup>を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況<sup>6)</sup>を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料を調査し、分類整理を試みた。目録等を参考に調査した結果、「佐渡家文書」「清水家文書」に往来物資料が存在することを確認した。本稿では、それらの資料を書誌情報と合わせて、一部画像を提示して紹介する。

### 3. 佐渡家文書と往来物資料について

佐渡家<sup>7)</sup>の初代は、越中砺波郡止観寺城主建部渡守



【画像1】

書名：新板庭訓往来  
 目的別分類：教訓科  
 表紙：青色、題箋あり  
 形状：縦25.5cm 横18.5cm  
 総丁数：52丁  
 出版地域：江戸

という。佐々成政に攻め滅ぼされた後、医術を生業とし飛騨高山に住み、慶長14（1609）年、前田利長の高岡入城時に召されて高岡に移住した。下川原町に住んだ後、利屋町へ移転し、産科医として名高かったという。高岡市立中央図書館所蔵の古文獻資料「佐渡家文書」は、412点（954冊）にのぼり、佐渡家歴代の著書や蔵書であり、9代養順の処置録や様々な写本、手稿本が含まれている。佐渡家が医業であったことから予想されることであるが、たとえば『医学早合点 上下』『医道日用綱目』等、近世期の医学や薬学に関係した貴重な文献も多数確認できる。

本稿では特に往来物資料に限って紹介することにした。高岡市立中央図書館の分類番号：佐渡家215、『新板庭訓往来』、分類番号：佐渡家263、『大宝百人一首紅葉錦』の2本である。

『新板庭訓往来』は、大きさは、縦25.5cm、横18.5cmである。袋綴じの資料であるが、中央部（折り目）に丁数を示す「〇一」「〇四十九」などがある。総丁



【画像2】



【画像3】

数は、52丁である。

往来物資料の中でも代表的な『庭訓往来』の一種である。当該資料は、江戸天保年間に新たに再版されたものであり、「新板」「平仮名付」と題箋にも記されている。つまり、漢字表記にすべて振り仮名が付されており、家庭や寺子屋での初歩学習のために音読活用されたものだと考えられる。『庭訓往来』は、中世から明治初年に至るまで最も普及した往来物の一つで、目的別分類としては「消息科」である。

中世期に作成された『庭訓往来』は、社会情勢や時代背景を異にする近世を経て、明治の近代に至るまで、かなり長い期間にわたって活用されてきた。川瀬一馬氏<sup>8)</sup>によれば、『庭訓往来』隆盛の要因として、仮名による注釈書の『庭訓往来抄』が多数作成されてきたことと関係すると推測されている。注釈だけでなく、本文の内容に即した絵図が掲載された『絵入庭訓往来』なども存在し、『庭訓往来』に関係したこうした往来物が幾種類も作られた。東北地域にも多数存在していることを筆者も調査過程で確認している。

【画像1】に表紙部分を紹介しているが、濃い青色の表紙に題箋が残っている。ただし、表紙は綺麗で綴じ糸も新しいため、元々の表紙でなく、後から修復した表紙で綴じ直した可能性が高い。題箋に書名として「新板 庭訓往来 平仮名付」とあり、その題箋の書名にも振り仮名が付されている。題箋では、はっきりと確認し難いが、【画像2】の表紙裏では、「庭訓往来」に「ていきんわうらい」、「平かな附」と記されていることが確認できる。変体仮名の字母「王」は、仮名の「わ」に該当するため、「ていきんわうらい」と付訓されている点が注目される。

古辞書における「往来」の漢字表記と付訓の関係を若干調査してみた。最古のいろは引き国語辞典といわれる、治承年間(1177~1181)成立の『三卷本色葉字類抄』<sup>9)</sup>では、「往来」の漢字表記に割注の形式で「行旅部 ワウライ」と記載されている。文明6(1474)年成立といわれる『文明本節用集』<sup>10)</sup>では、二か所に振り仮名付きで「往来」の記載を確認し、「往還一返一復一來一往」もあった。文明16(1484)年成立の最古の五十音順の辞書『尊経閣文庫蔵 温故知新書』<sup>11)</sup>には「往 来 還」、『静嘉堂文庫蔵 運歩色葉集』<sup>12)</sup>には、「往生 往代 往古 往還 往来」とあった。

元禄11(1698)年成立の『書言字考節用集』<sup>13)</sup>には、「往々 一復 一反 一還 一來」、「往来物」とある。「往来物」に振り仮名で「ワウライモノ」、そしてその割注に「風月明衡庭訓雑筆之類書翰通稱」と記載があ

り、「風月往来」「庭訓往来」等の書物を指した「往来物」といった名称が通用していたことが知られる。

他方、1603年に刊行された『日葡辞書』<sup>14)</sup>には、「Vörai.」で立項されている。『邦訳日葡辞書』では「Vörai. ワウライ (往来) Yuqi qitaru. (往き来たる) 行くことと来ること。また、日本で作られた或る種の書物。」と説明されている。また、幕末の1886年にJ・C・ヘボンによって作成された『和英語林集成』<sup>15)</sup>では、「ÖRAI」で立項され、「ワウライ 往来 (Yukiki)」との説明がなされている。「ÖRAI」と「Ö」で発音が示されながら、仮名では「ワ」が使用されている点が注目される。

本稿で取り上げた『新板 庭訓往来 平仮名付』では、古辞書でも確認できたように伝統的な表記「ワウライ」を踏襲していることになる。通常の音韻変化をたどったとすれば、「往来」は、語中の母音連続[au]が長音化し、[ɔ:]に移行し、オ段長音の開音だった[ɔ:]が合音の[o:]と移行していったと推測できる。つまり、[waurai] → [wɔ:rai] → [wo:rai] → [o:rai]と発音は変化していったが、表記の方は追隨することはなかったのである。

一般に古語の音韻の名残は、地方の発音に方言としてみられることがある<sup>16)</sup>が、「往来」は現在では『和英語林集成』に見られるように「ÖRAI」が一般的な発音である。音韻変化が起こったはずであるが、種々の文献に「ワウライ」と記載され続けたことで固定化し、表記と音韻との不一致が一般化していたと考えられる。当時の漢字表記と付訓との関係の一面がうかがえる事例であるといえるだろう。

【画像2】の表紙裏部分には、題名だけでなく「天保新板」「皇都書肆」とあり、天保年間に新たに江戸の書誌で再版されたものであることも知られる。加えて【画像3】は、最終丁の52丁裏と刊記記載部分であるが、「皇都書肆」「醒ヶ井五条上ル」「藤井文醒堂」「近江屋卯兵衛 板元」と記されており、出版元を確認することもできるのであった。なお、『国書総目録』には同様の書名が見当たらなかった。

『大宝百人一首紅葉錦』【画像4】～【画像7】は、全228丁で厚さが8cmもある資料である。大きさは、縦25.4cm、横18.0cm。『国書総目録』<sup>17)</sup>には、同様の題名で「石川謙」個人所蔵一冊のみが記載されている。つまり、当該資料はそれに追加されるべき貴重な存在なものであることが知られる。目的別分類では、女子用往来である。

当該資料『大宝百人一首紅葉錦』は大部なもので

あり、題名に「百人一首」という用語が使われているが、「百人一首」にとどまらず、「七夕歌それぞれ」「官位装束の図」「女官装束の図」や年間の行事や四季折々の異名など、多岐にわたって記されたものである。【画像5】は、表紙裏と一丁表部分であるが、美しい多色刷りである。【画像6】からも知られるように文章だけでなく、随所に絵が描かれており、女性用の一般教養書といった類といえよう。当時の女性が身につけておくべき生活上の注意点や約束事が列挙されていて、百科事典的な役割をもっていたと考えられる。実際に佐渡家で利用され、活用されてきたものであろう。

こうした女子用往来資料が、当時の生活を知る資料としてだけでなく、国語学の資料としても有用性があると考えられる点は、次のような一文から確認できるであろう。たとえば十八丁裏に「百人一首の歌に付てはかずかず口伝あるけれども、その家々の秘事なれば、ここにしるさず。まづ、あらましをあぐるのみ。なをくはしきことはそのいへいへのをしへをうけてあきらむべし。それぞれこのところは、そのあらましをあくるのみ。」という一文が記されている。それぞれの家庭ごとの教育が大事にされていた様子を知ることができる箇所である。

国語学的な観点から、ここで注目される用法として「付ては」を指摘することができる。すでに現代語と同様にイ音便化していることが知られる。本来の古典文法に則れば、動詞「付く」＋接続助詞「て」は、

連用形接続であるため「付きて」となるべき箇所である。ただし、その後の文章中には形容詞「くはし」が、イ音便化しない「くはしきこと」との語形で記されている。こうしたイ音便化の揺れが確認でき、移行期の実態が表出している可能性があるといえよう。ま



【画像5】

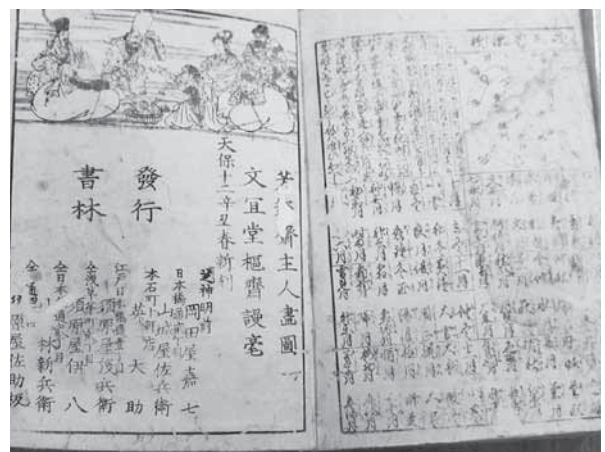


【画像6】



【画像4】

書名：大宝百人一首紅葉錦  
 目的別分類：女子用  
 表紙：薄青色、題箋あり  
 形状：縦25.4cm 横18.0cm  
 総丁数：228丁  
 出版地域：江戸



【画像7】

た、動詞の活用の種類も減じる方向にあり、近世期には二段活用が一段化する傾向がすすんでいたが、下二段活用動詞「あぐ(挙ぐ)」はまだ一段化していない語形で記されている。

国語学的な検証は、今後の課題であるが、音便化や一段化への移行期といった近世という時代性が確認できる言語事例が、いくつか散見された。

最終丁部分【画像7】では、「天保十二年」という刊行年と「発行書林」として「芝神明前 岡田屋嘉七」「日本橋通式丁目 山城屋佐兵衛」「本石町十軒店

英大助」「江戸日本橋通壺丁目 須原屋茂兵衛」「同浅草茅町式丁目 小林新兵衛」「同通四丁目 須原屋佐助板」の7軒が列挙されている。「須原屋佐助板」とあり、須原屋佐助が板の所有者で版元と思われ、他と共同で出版や流通を請け負う形式をとっていたらしいことも確認できる。

以上、2本が佐渡家文書のなかに見られた往来物資料である。このほか清水家文書のなかにも2本の往来物資料が確認できた。

#### 4. 清水家文書と往来物資料について

清水家文書<sup>18)</sup>は、1995(平成7)年に清水幸次氏(清水家15代)より寄贈されたものという。

清水家初代は、尾張国(現愛知県)の浪人であった辻庄左衛門で、のち越前国府中(現武生市)に移り、慶長年間に前田利長のあとを慕って、越中国氷見

に移住し町人となった。後二代目が現守山町に引っ越し、榎屋九郎右衛門と名乗り、御荷物宿を仰せ付けられたという。薬種業は、1688(元禄元)年、榎屋の屋号で開店したのが始まりであり、清水家に伝わる古文獻は270点(523冊)に及び、薬学関係の書物のほか、医学、文学、教育、教養関係など多岐にわたる書物が代々受け継がれてきた。

高岡市立中央図書館の分類番号：清水家101、『女用文章綱目』、分類番号：清水家122、『正音千字文』の2本をここでは紹介する。

【画像8】は『女用文章綱目』の表紙であるが、題箋がすでにはがれていることが確認できる。表紙の色は、青色。大きさは、縦26.0cm、横16.0cm。【画像9】は一丁表の目次部分にあたるが、表紙の裏部分や最終丁にも損傷が見られる。【画像10】は最終丁部分である。

この資料は、本来二巻二冊のものであり、当該資料はその上巻であると思われる。総丁数24丁で奥書部分



【画像8】

書名：女用文章綱目  
 目的別分類：女子用  
 表紙：薄緑青、題箋なし  
 形状：縦26.0cm 横18.0cm  
 総丁数：24丁  
 出版地域：不明



【画像9】



【画像10】

は確認できない。高岡市立図書館の古文献資料データによれば、「元禄11年刊」とされるが、刊記記載部分は確認できない。題名については、題箋もないが、袋綴じの中央部（折り目）一丁めに「女用文章綱目 上〇」と確認できる。二丁目は「女用文章綱目 上二」と丁数が示されている。実物の文献資料を調査することではじめてこの題名の記載を確認することができるといえよう。『国書総目録』<sup>19)</sup>によれば、「慶応」「凌霏文庫（下巻のみ）」、「石川謙」が所蔵し、「元禄11刊」と記載されている。高岡市立中央図書館所蔵資料は、上巻だけではあるが、貴重なものといえるだろう。

【画像11】は、『正音千字文』の表紙であるが、濃い青色の表紙は、綴じ糸も新しく、後に修復されたものである可能性がある。題箋は残存し、「正音千字文」の題名が確認できる。大きさは、縦23.0cm、横16.0cmで全16丁である。学問の始めに正しい音を読み習えば有益であり、音韻清濁をはっきりと字の意味も学ばせる、という姿勢で教育が行われていたことが知られる資料である。兄の草稿を引き継いだ、土田親命が1838（天保9）年に著わしたものである。【画像12】は一丁表の部分であるが、ここに見られるように漢字とカタカナで表記されている。【画像13】は最終丁部分であり、「天保九年戊戌夏六月」と作成年、「土田親命」と著者名が確認できる。

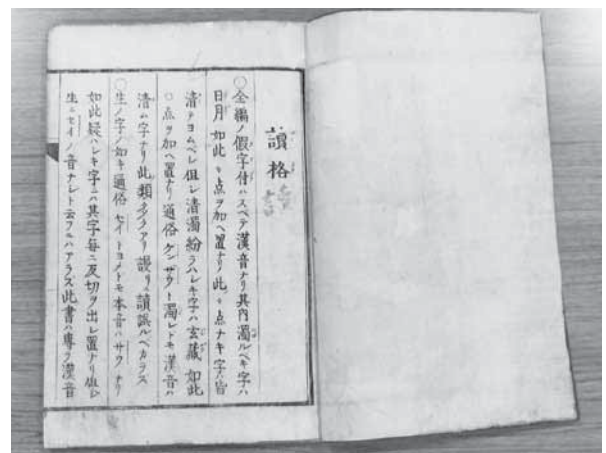
この資料における国語学的な注目点について少し紹介しておきたい。文字表記として「ㄱ」「ㄴ」という、

興味深い表記が使用されている。いわゆる略字体の合字である。「ㄱ」は記号的に使用されたもので「コト」の意を示し、「ㄴ」はカタカナの「ト」と「モ」を合わせて一文字で「トモ」の意を示した用字である。築島裕氏<sup>20)</sup>によれば、「トモを「ㄴ」とするのは古く例が見えず、近世になってからの産物かと思われる。」とされ、この「ㄴ」表記が、近世期にはかなり一般化することについては、谷光忠彦氏<sup>21)</sup>が明らかにされている。しかし、鎌倉室町期にはかなり限定的な使用だった「ㄴ」表記が、近世のいつごろに流行し、またいつごろから使用が減少し、現在のように全く見られなくなるか、といった推移やその理由などについては未解明なままの国語表記上の課題となっている。読み方の指導でいえば、【画像12】の7行目に見られるように「〇生ノ字ノ如キ通俗セイトヨメトモ本音ハサウナリ」とあり、「サウ」→「セイ」の移行を推測させる記述がある。また3丁裏3行目には、「化」の漢字に「クワ」とカ行合拗音での振り仮名が示され、

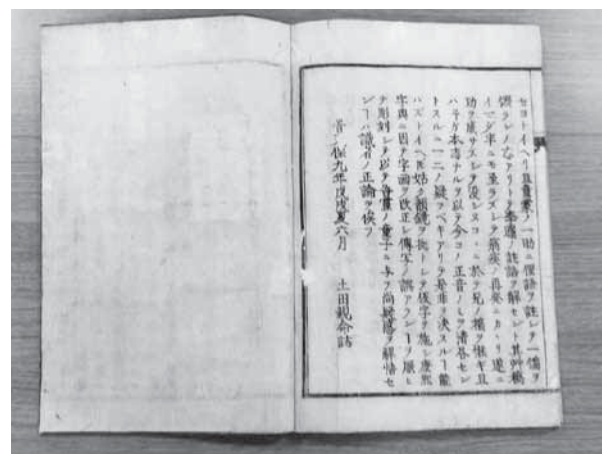


【画像11】

書名：正音千字文  
 目的別分類：語彙科  
 表紙：紺色、題箋あり  
 形状：縦23.0cm 横16.0cm  
 総丁数：16丁  
 出版地域：不明



【画像12】



【画像13】

「方」に「ハウ」と古語での振り仮名が見られるなど、指導の一面がうかがえる。本資料は、『国書総目録』<sup>22)</sup>では、写本が「お茶ノ水武藤文庫」に所蔵されているのみという。版本としては当該資料しか確認できないため、貴重な文献といえるであろう。

## 5. まとめにかえて

高岡市立中央図書館に所蔵されている往来物についての調査報告として、書誌とともに国語学的な事象に触れつつ紹介してみた。資料は、それぞれ「佐渡家」「清水家」で所蔵されていたことが判明している。4本という資料数は、必ずしも多いとはいえないが、実際に使用された家庭や背景が明らかであるという点において貴重である。

目的別分類でみると、消息科往来が『新板庭訓往来』の1本、語彙科往来が『正音千字文』の1本、女子用往来が、『大宝百人一首紅葉錦』と『女用文章綱目』の2本という結果であった。出版地域別にみると、江戸が2本、不明が2本であった。

すでに調査報告した富山県立公文書館の結果と合わせて、富山県における往来物所蔵実態を確認することを通して、地域の教育環境や文化的背景についても考察検討が可能となるであろう。今後も北陸地域の所蔵状況について調査を実施し、研究の進展に努めたい。

## 注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書 10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察—山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。
- 2) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、拙

稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料—目的別分類からの考察—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について—往来物資料の出版地域からの検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察—弘前・酒田・山形との比較検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月)等参照。

- 3) 拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月)参照。
- 4) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)を参考とした。
- 5) 地方出版の研究には、大田正弘著『尾張出版文化史』(六甲出版、1995年)、須山高明「近世紀州の『書商』」(『和歌山地方史研究』第38号、2000年)、鈴木俊幸「地方の本屋さん—たとえば高美屋甚左衛門—」(『国文学』42巻11号、1997年9月)等がある。
- 6) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(1789~1801)を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。
- 7) 高岡市史編纂委員会編『高岡市史 中巻』(高岡市、1963年)、館秀夫著『とやまの医学史』(日本医事新報社、1993年)、正橋剛二著「越中高岡蘭方医の研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第116集、2004年2月)、『高岡市史料集 第15集』(高岡市立中央図書館、2004年)等参照。
- 8) 川瀬一馬「庭訓往来の假名抄について—古往来の研究(その三)—」(『青山学院女子短期大学紀要14』1960年11月)参照。
- 9) 中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄研究並びに索引』(風間書房、1964年)によった。98頁参照。
- 10) 中田祝夫著『文明本節用集研究並びに索引 影印編』(風間書房、1970年)によった。191頁、317頁、121頁参照。
- 11) 中田祝夫・根上剛士著『中世古辞書四種研究並びに総合索引』(風間書房、1971年)所収の『温故知新書』によった。487頁参照。
- 12) 中田祝夫・根上剛士著『中世古辞書四種研究並びに総

- 合索引』（風間書房、1971年）所収の『運歩色葉集』によった。168頁参照。
- 13) 中田祝夫・小林祥次郎著『書言字考節用集研究並びに索引』（風間書房、1973年）によった。374頁、310頁参照。
  - 14) 亀井孝解題『日葡辞書』（勉誠社）、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980年）の717頁参照。
  - 15) J・C・ヘボン『和英語林集成（第3版）』（講談社学術文庫、1980年）によった。478頁参照。
  - 16) 土井忠夫・森田武著『新訂国語史要説』（修文館出版、1975年）の224頁に「今日、語中語尾のオを〔wo〕と発音するところは、東北・北陸・九州などの各地にある。これも古語の残存と見られようか。それに比べて、語頭のオを〔wo〕と発音しているところは少ないようである。」とある。
  - 17) 『国書総目録 第5巻』（岩波書店、1967年）の481頁参照。
  - 18) 城宝正治・綿貫豊昭編『清水家沿革歴代資料』（1994年3月）、飛見丈繁編『高岡の町役人』（飛見丈繁刊、1959年）等参照。
  - 19) 『国書総目録 第1巻』（岩波書店、1963年）の722頁参照。
  - 20) 築島裕『日本語の世界5』（中央公論社、1981年）所

収の「第三章 平仮名・片仮名の発達と展開」参照。

- 21) 谷光忠彦「合字に関する一試論」（『中央大学国文』第33号、1990年3月）参照。こうした表記特性に注目して、それを根拠に資料の時代性を論じたものに拙稿「真字本方丈記試論—その表記を中心として—」（『真字本方丈記 影印・注釈・研究』和泉書院、1994年、所収）がある。
- 22) 『国書総目録 第5巻』（岩波書店、1967年）の68頁参照。石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』（大空社、2001年）、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 函版編』（大空社、2001年）には、記載が見られない資料である。

#### 【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、高岡市立中央図書館の関係者各位に対し、心より感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI（基盤研究（C） 課題番号15K02555）の助成を受けた研究成果の一部です。

(2016. 1. 8 受理)